

## 美術の窓(100)

雪村の自画像  
— 友の会特別鑑賞会に寄せて

大和文華館館長 水田 徹

大和文華館は7点もの雪村画のうち3点が重要文化財)、初期から晩期作まで制作年代もバランスよく所蔵しております。この度、春の第二回展を機に友の会特別鑑賞会を催し、雪村作品をじっくり観賞いただくことになりました(詳細は本号末尾の案内をご覧ください)。爽り多い鑑賞会への一助にと念じ、現存する日本最古の自画像と目される「雪村自画像」(図1)を手懸かりに、雪村画の魅力の一端をご紹介します。

雪村は室町時代後期に常陸国部垂(今の茨城県那珂郡大宮町)に戦国武将佐竹氏一族の長男として生まれましたが、父に疎んじられ出家し、夢窓疎石を開祖とする常陸太田の禅宗寺院・正宗寺に入り、禅僧雪村周継として修業を重ねるかたわら画業にも勤しみ一家を成し、やがて会津の武将輩名氏の庇護を受け、さらに小田原、鎌倉にも赴き早雲寺、円覚寺の高僧の知己も得、その後再び会津を経て、晩年は奥州田村の三春(福島県三

春町)に庵を結び、ここに隠棲しました。「雪村自画像」はその最晩年の作と考えられます。

さて禅宗では頂相と称される高僧の肖像画が多数制作され、雪村自身、小田原の早雲寺で開祖「以天宗清像」を描いています(図2)。頂相は伝法の証として弟子に授けられるもので、現に「以天宗清像」が典型的な例ですが、像主は衲衣と袈裟に盛装し、曲糸と呼ばれる立派な椅子に斜め前向きに腰掛け、足元には沓台が置かれます。相貌も若干の肖像性を備えながら概して端正な顔立ちに描かれます。

ところが「雪村自画像」はどうでしょう。椅子は節くれだった竹製となり、作務用の小さな袈裟を着け、豪華な法被(敷物)は鹿皮に代わり、沓は草履となり、一介の画僧らしく質素極まりない出で立ちになっています。

身繕いだけでなく身体の動きも大きく違っています。上半身は頂相と同じく斜め右向きですが、如意を持つ手は逆に左に大きくずれ、しかし両袖の衣

文の流れが端的に示すように、両腕は如意を身体の正面、つまり向かって右に移動させようとしています。「以天像」に比べ草履の先が一段と強く右を向いているのも、像の右への動きを補強しています。

一見静止像とみえる像容の中に込められた強い動感、それは首頭部の造作にも見て取れます。

江戸末期の水戸藩士・加藤寛斎が地元に残ると書き残した口碑に、雪村の容貌は「総髪にて目眸清く眉毛長く身に直接を著け手に一個の鉄如意を持、優然たる光景おのつから長者の形相ありとそ」とあり、「雪村自画像」の風貌を髣髴させます(小川知二『常陸時代の雪村』2004年)。が同時に、への字に結んだ口と鼻先をぐっと突きだし、鋭い眼光を右彼方に向け、頭蓋の輪郭もその方向性を正確に捉え、身体の動きに対応しています。

背景表現もまた然りです(図3)。一見、月明かりに照らされた静かな雪山風景ようですが、通例の雪山図に比べ山も月も大きく、像主のすぐ背後に迫るように描き、かつ淡墨で隈取った上にさらに胡粉でハイライトを施し、月の明るさ、雪の白さを際立たせています。その白さは人物の白髪や襟元と袖口の衣文にひととき鮮明に繰り返され、見る者の視線を改めて像主の右への動きに誘います。

今一つ注目すべきは山の稜線の描き方です。切り立ち反り返る山容や奇岩は雪村画のライトモチーフの一つで、その造形を雪村は関東の有力画家祥啓一派から学んだとされます。が、ここでは白く縁取りされた月と手前の山の稜線が画面左上から右下へ一直線に駆け下り、先述の身体の右への動きを補強する役目を果たしています。

そもそも日本の肖像画は自画像も含め、一般に背景は描きません。せいぜい人物の背に立つ屏風や衝立に画中画として山水が描かれる程度です。ところが「雪村自画像」は背景にれっきとした風景を描き、かつその造形が前景の人物表現と一体化しているのです。

人物と背景が相俟って一定方向への動きを内包するこの構図に、雪村はいかなる意味を込めたのでしょうか。画面右上の雪村自賛に注目しましょう。左から右へ、やはり微かに右下方向へ傾きつつ

山川一色綿よりも白し  
茅屋斜に連なり淡煙を籠む  
興尽きて棹を回して去るに如かず  
柴門流水月明の前

と、中国晋代の王子猷の故事「子猷訪戴」を主たる取材源とした七言絶句が記されています。「雪の止んだ月明かりの夜に、川上に隠棲する友を訪ねたが、門前に来て急に興が冷め、友に会わずにそのまま棹を回して帰った」という意味で、世俗から離れ、我が道を行く雪村の心境を詠ったものと考えられます。そしてその強い自我意識、自負心こそが、如意の構えに端を発し、背景と賛をも巻き込んだ画面全体の右方向への収斂という構造に可視化されているのではないのでしょうか。

近年その信憑性に疑義が唱えられ、しかし内容そのものは雪村の人格と作品を正確に捉えていると考えられる雪村の画論『説門弟資云』(門弟の資すに説いて云)は、画の筆法、墨の用い方を説いた後、最後をこう締めくくっています。

「故に画は則ち形は万象に倣ひ、筆跡の省略は師により、筆力は自己の心意に止めて、筆を振ふべき事なり、然らざる時は予が画筆と云べからず、予は多年雪舟に学ぶといへども、画風の懸隔せるを見よ、画の事は山水人物を生涯の骨目として修業すべき事也」(福井利吉郎校訂)。心意の表現を旨とすべし、画中から雪村の声が聴こえてくるようであります。

図3「雪村自画像」全図



図1「雪村自画像」部分



図2「以天宗清像」部分、大徳寺芳春院蔵



季刊 美のたより No.158

平成19年4月1日

発行 大和文華館